「笹川杯作文コンクール 2009」～日本語で応募～ 優秀賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

「姿勢」

上海師範大学　姜陸波

私が初めて剣道場に入ったのは中学の時だった。その時、私の好奇心が先ず感知したのは、整然とした秩序だった。質素だが、ピカピカしている床、そこにきちんと置かれている防具。全てが落ち着いていて、整然としている。稽古をしている人間も例外ではない。みんな背筋をピンとさせて素振りをしている。竹刀を振る度に、「はっ」という低い声と、「ヒュッ」という音がする。中国の武侠映画に出てくるドタバタは少しもない。当時の私には分からなかったが、動いている人が落ち着いているように見えたのは、剣道の「姿勢」のせいだった。入門以来、この姿勢が、私の生活の中で最も日本的なものとなっている。そして、私の師範の口癖・「剣道は姿勢」が私の原点になっている。

もちろん姿勢といっても、色々ある。それは、剣道には多くの型があるからだ。上段、中段、下段、八相、脇構。上段はさらに左上段と右上段の二つに分かれ、中段から発展した青眼もある。このような型は、剣道の姿勢に対する要求が如何に厳格かということを表している。それは当然だ。動作は、全て最初の姿勢から生み出されるからだ。今、師範の試合を見ていても、姿勢の大切さがよく分かる。ゆったりと構えて、ある時、ほとんど動かなくなる。と、次の瞬間、鏡となった水面から巨大魚が飛び出すように、ものすごい勢いの一撃が相手の面を襲う。決まった！腕と竹刀が一直線になる。この美しいフィニッシュも、最初の姿勢がきちんとしているからこそなのだ。

しかし、この姿勢を身につけることは大変なことだ。多くの人は、竹刀を振る時、肘と肘が自然に離れてしまう。そのせいで体全体の姿勢が崩れ、力が竹刀に伝わらなくなるのだ。困難は、技術上のことだけではない。誰でもそうだが、早く試合がしたい。だが、やらせてもらえない。私達がどんなに頼んでも、師範は「剣道は姿勢」といって、素振りを強制し、その姿勢をチェックする。それが嫌でやめる人も少なくない。実は、私自身も姿勢とそのための素振りには、うんざりしていた。それでも、何とか今日までやってこれたのは、やはり師範のおかげだ。師範の剣道、教育への「姿勢」が、私達を動かすのだ。

私の師範は中国人で、もう50歳をとっくに過ぎている。だが、今でも、私達と一緒に準備運動からはじめ、私達と一緒に汗を流す。常に私達の稽古に目を光らせ、私達が少しでも怠けると、容赦なく竹刀で尻をたたく。また、少しでも間違った稽古をしていると、直ぐに誤まりを指摘し、模範を見せて何度も練習させる。私は最初、竹刀の柄が正しく持てなかった。よく野球のバットを握るようになってしまった。それを見た師範は、手と手が引っ付かないように、それぞれの手をベルトで柄に縛った。そして、そのまま、手に力が入らなくなるまで、素振りをさせた。本当に厳しい、鬼の師範だ。

しかし、優しいところもある。ある時、私は他人の汗を踏んで転倒してしまった。脚が変な曲がり方をしたせいで、激痛が走った。師範は血相を変え、飛んで来た。「大丈夫か」といいながら、懸命に脚をマッサージしてくれた。また、稽古が終わると、いつも父親のように接してくれる。私達が楽しみなのは、師範の体験談だ。師範は色々な国に行ったことがある。もちろん日本経験も豊富だ。師範によれば、日本人の練習者は礼儀正しい。それは剣道をする時だけではないそうだ。ある時、師範はこんな話をしてくれた。

「彼らと食事をした時、部屋が静かになった。箸の使い方が実に上品で、音を絶対立てない。箸で少しづつ取って、優しく食べる。我々が想像する乱暴な武士とはぜんぜん違う。むしろ貴族のようだ。日常の礼儀ができているから、剣道もできる。逆も然りだ。剣道で礼儀を身につけ、日常を律するんだ。」

私は、師範の話を聞き、師範と稽古を重ねるうちに、「姿勢」とは何かが少しずつ分かってきた。剣道が教えるのは、如何に相手を負かすかというより、如何に人を遇するか、ということだ。もちろん己に克たないと剣道の技は身につかない。だが、その技を本当に己のものにするためには、他人と一緒に稽古を積まなければならない。相手を尊重し、共に成長していくのが剣道だ。剣道は型や礼儀にうるさいが、これも相手を尊重し、共に成長していくための作法だろう。その作法の結晶が「姿勢」なのだ。師範の「姿勢」は本当に美しい。それは師範の人格そのものだ。師範は日本人に負けないくらい日本の良さを学び取り、自分を鍛え上げているのだ。

師範のおかげで、私は剣道がますます好きになり、日本の武士道、刀剣、その他日本の伝統文化に関心を持つようになった。さらに日本語も習い始め、今では大学日本語学科の 2 年生だ。しかし、どんなに関心が広がっても、私の原点は師範の言葉だ。「剣道は姿勢」。私はこの言葉をかみ締めながら、これからも剣道を学んでいくつもりだ。